



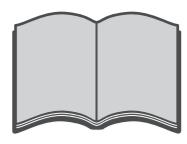
©Jarkko Mikkonen/Finnish Red Cross

わたしたちは、
たいふう えがお
台風から笑顔をとりもどしました。



©Mark Munkel, Danish Red Cross





本教材のねらい

青少年赤十字は「健康・安全」、「奉仕」、「国際理解・親善」の3つの実践目標を掲げ、「気づき」、「考え」、「実行する」の3つの態度目標のもと、日本全国1万3,000校以上の幼稚園・保育所、小中高等学校、特別支援学校等で、300万人を超えるメンバーが様々な活動に取り組んでいます。

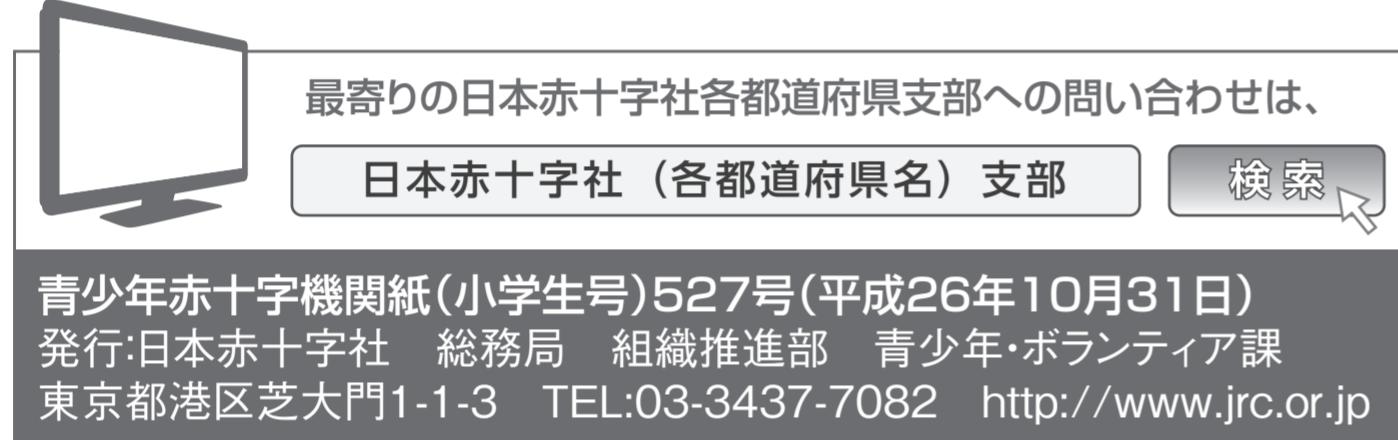
今回は、2013年にフィリピンで発生した台風の被害に対して、日本赤十字社が取り組んだ救援活動を紹介します。そしてここから、青少年赤十字メンバー一人ひとりが、身近にある「自分にできること」に目を向け、気づきを促す構成としました。青少年赤十字メンバーが「誰かのために役立っている」という感覚を体験できれば、行動に自信が湧き、他者とのかかわりを充実させることにもつながります。

本教材を通じて、日本の青少年赤十字メンバーが世界の現状に关心を寄せるとともに、自身の「当たり前」を改めて見直し、青少年赤十字の実践目標のひとつである「国際理解・親善」が一層促進されることを期待します。

▶ 本教材の使い方(例)

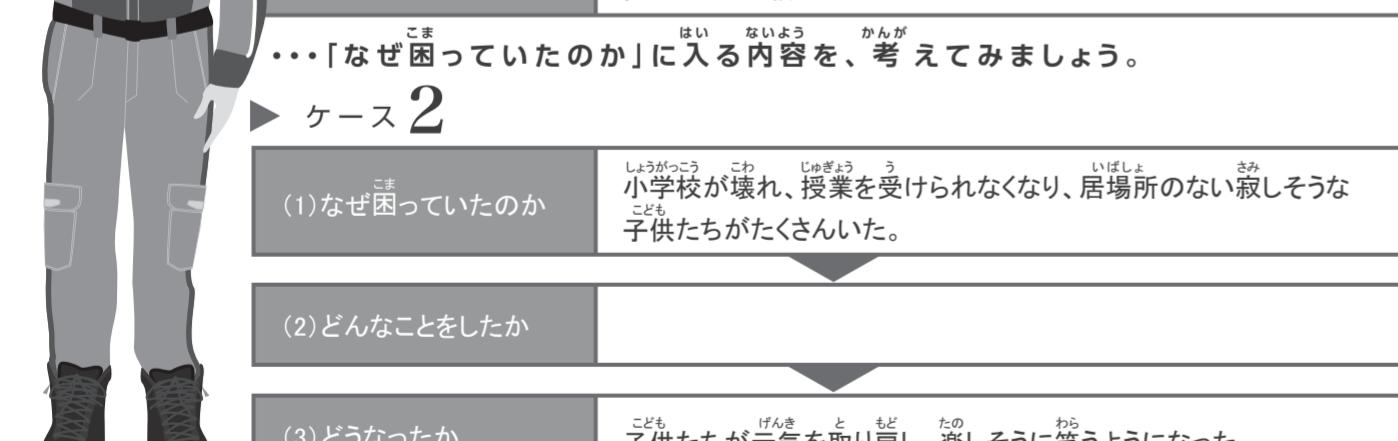
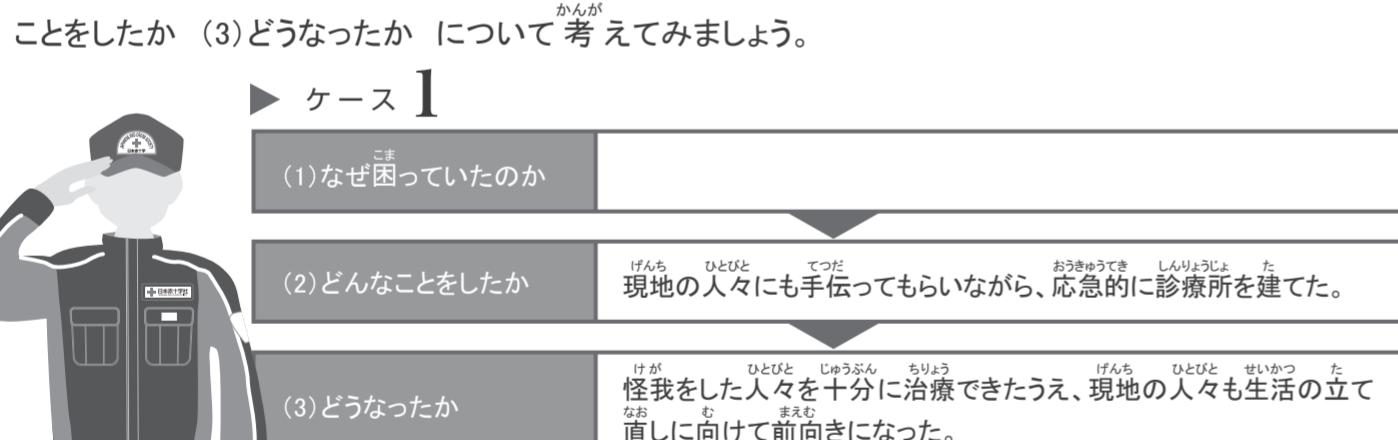
本教材の裏面(こちらの面)はA4判4ページで構成されています。それぞれをコピーすれば、ワークシートと解答例としてご利用頂くことができます。また、同一の内容はPDF形式のデータとして、下記ホームページに掲載しています。無料でダウンロードできますので、写真や記事を自由にご活用ください。

日本赤十字社ホームページ「資料で見る青少年赤十字」
<http://www.jrc.or.jp/activity/youth/document/>



ワークシート②

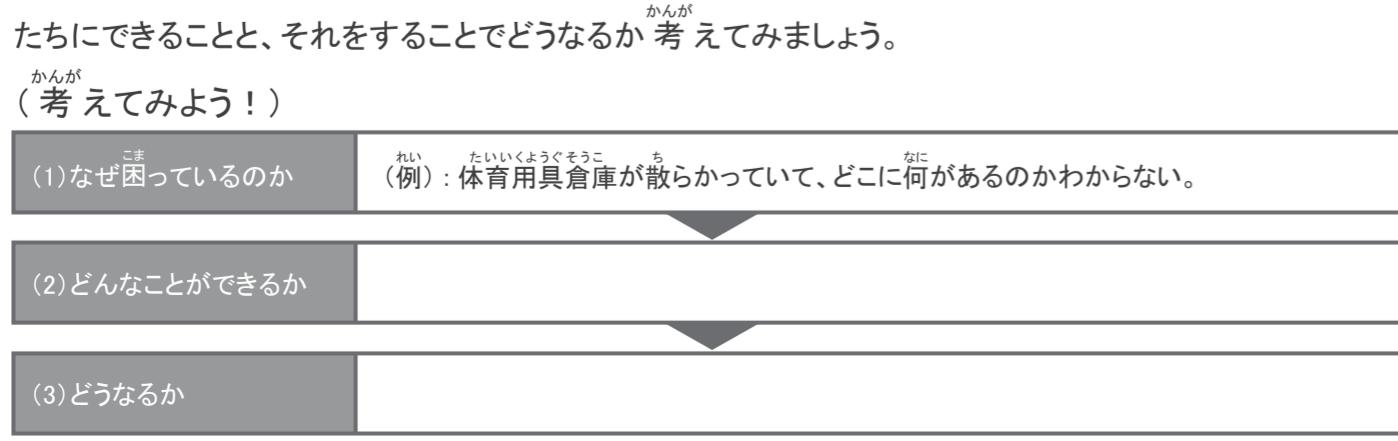
ハイエンの直撃から5日後、日本赤十字社は特に訓練したチーム(保健医療チーム)をフィリピンに送り、セブ島北部のダンバンタヤン郡で、被災した人々を助け始めました。このチームは、苦しんでいる人々が早く元通り元気に暮らせるようになるために、なぜ困っているのか調べながら、約3か月間活動しました。ここでは、チームのメンバーがフィリピンでしたことをもとに、(1)なぜ困っていたのか (2)どんなことをしたか (3)どうなったかについて考えてみましょう。



ワークシート③

災害時だけではなく、私たちのいつもの生活でも、相手への小さな気づかい(思いやり)で、物事をよりスムーズで気持ちよく進められるようになることはありませんか?

毎日の生活中で「このままで良いのだろうか」と感じる場面(なぜ困っているのか)を思い出して、自分たちにできることと、それをしてすることでどうなるか考えてみましょう。



こんなニュースを覚えていますか?

2013年11月8日、観測史上最大規模の台風30号(ハイエン)がフィリピン中部を直撃し、猛烈な風、高潮(海面水位の異常な上昇)によって広い範囲で被害をもたらしました。その被害状況とは、どれほどだったのでしょうか。1959年に日本国内に記録的な被害をもたらした、台風15号(伊勢湾台風)を例にして、比べてみましょう。

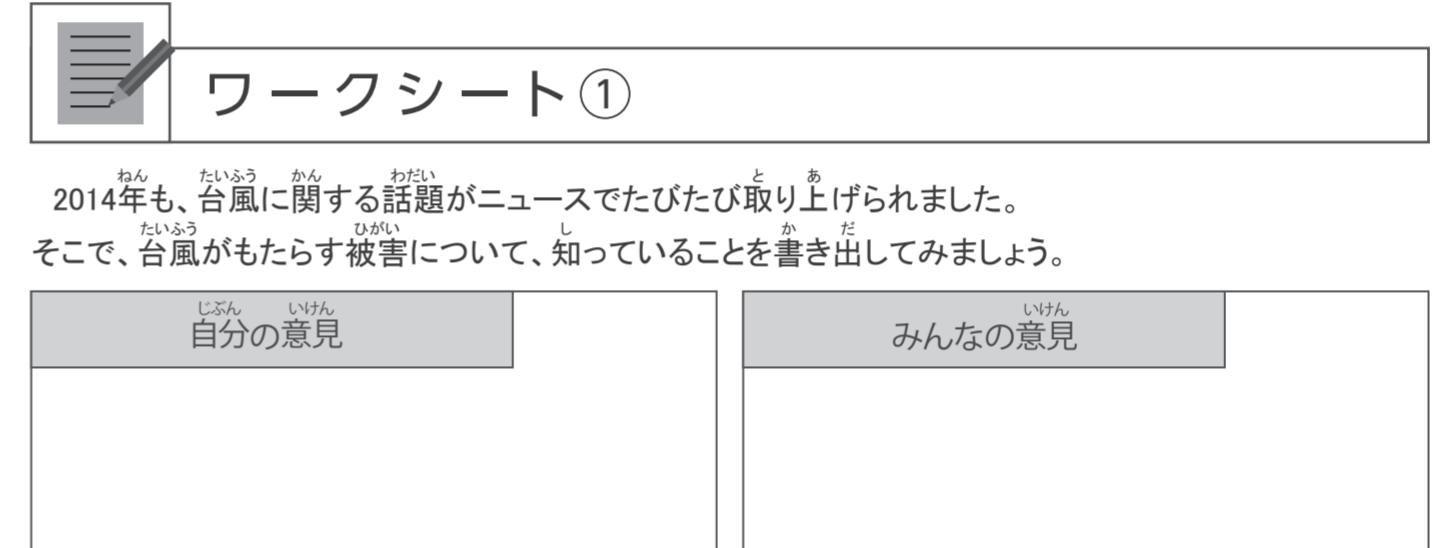


フィリピン:ハイエンによる被害状況		日本:伊勢湾台風による被害状況	
死者	6,300人	死者	4,697人
行方不明者	1,061人	行方不明者	401人
負傷者	28,689人	負傷者	38,921人
損壊家屋	約108万棟	損壊家屋	約15万棟

(2014年4月17日付フィリピン国家災害防護委員会発表資料より)

(『平成25年版消防白書』より)

日本にいる私たちには、フィリピンで起きたこの災害を「海の向こうの出来事」のように感じるかもしれません。ところが、ここ30年間の記録を平均すると、1年間に約11個の台風が日本から300km以内に接近し、そのうち約3個が日本に上陸していることになります。ハイエンや伊勢湾台風ほどの大きな被害につながる場合ははまですが、日本にとって台風とは、地震などとともに、災害を引き起こす可能性のある身近な自然現象のひとつといえるでしょう。



ワークシート①

2014年も、台風に関する話題がニュースでたびたび取り上げられました。そこで、台風がもたらす被害について、知っていることを書き出してみましょう。

じぶん 自分の意見	みんな みんなの意見
--------------	---------------

ワークシートの解答について

ワークシート① (例) 大雨で電車がストップする、強風でビニールハウスが壊れる、など

ワークシート② 日本赤十字社がフィリピンに派遣した保健医療チームのメンバーへのインタビュー①・②をご覧ください。

▼ インタビュー①: 田中嘉一(日本赤十字社熊本県支部) ※こちらのインタビューを元にケース1を作成しています。

Q1. なぜ困っていたのか

医療機関が倒壊するなど被害が大きく、医療に対するニーズを感じました。また、被災により現地の人々も落ち込んでいました。

Q2. どんなことをしたか

現地にテントで仮設診療所を開設しました。その際、現地の人々にも外壁の修復等に関わっていただきました。

Q3. どうなったか

仮設診療所が完成したことで、けがを負った人々を十分に治療することができました。さらに、私たちが復興に向けて取り組むのを見て、元気をなくしていた現地の人々が、「自分たちもやらなければならない」と意欲的に乗り越えようとする様子が見てとれました。

Q4. 日本の青少年赤十字メンバーへメッセージ

とにかくトライしてみることが大切だと思います。そこで初めて自分の実力が分かり、どうしたら達成できるのかを考えることができます。私も、英語が不得意でありながら国際救援にトライしてみました。課題もたくさんありましたが、「トライしてよかったです」と、心から思っています。

皆さんも「夢」や「希望」を大きくなって、いろんなことにトライしてみてください。

▼ インタビュー②: 森光玲雄(諏訪赤十字病院) ※こちらのインタビューを元にケース2を作成しています。

Q1. なぜ困っていたのか

現地の小学校は激しく壊れ、限られた教室しか使用できません。授業は大幅に縮小され、居場所をなくした子供たちは、やるこどもなく道ばたに座り込んでいました。子供も教師も、当たり前の日常が奪われてしまった状況でした。

Q2. どんなことをしたか

壊れた小学校の隣に、誰でも自由に入り出でて、仲間と遊べる、子供の遊び場をつくりました。そこにはぬり絵や折り紙などの屋内遊びだけでなく、なわとびやフリスビー、ボール遊びなど、思い切り身体を使って遊べる屋外遊びも用意し、子供達が楽しみながらストレスを発散できるようにしました。

Q3. どうなったか

学校の友達と遊び、触れ合う機会をもつことで、子供たちが活き活きと楽しそうに笑うようになりました。そして、遊び場の掃除や、テントの開け閉めを進んで手伝う子供も現れました。この遊び場は子供たちにとって、まさに「自分たちの居場所」になっているのだと確信しました。

Q4. 日本の青少年赤十字メンバーへメッセージ

仲間や友達を大切にしてください。自分の身の周りの人とのつながりを大切にしてください。つらいこと、悲しいことが起ったときは、人とのつながりが一番の支えになります。そして自分の友達や家族だけにとどまらず、あなたがまだ知らないところで苦しむ人々のためにできることを探し、行動できる勇気を持ってほしいです。

保健医療チームの詳しい活動については、こちらのホームページもご覧ください。

日本赤十字社ホームページ「フィリピン(中部台風救援事業)」

http://www.jrc.or.jp/activity/international/results/140502_001031.html

ワークシート③ 例では、先生などと相談して倉庫のどこに何をしまうかを決めたり、しまう前に用具の汚れをきちんと取るなどのルールを作るのも解決策の一つでしょう。なぜ困っているのかその理由をよく調べ、どんなことをすれば困っていることを解決でき、良い結果になるか、まずは自分で考えてみてください。そして、友達や先生にも意見を聞いてみましょう。この積み重ねが、皆さんのがいりの心を育むことにつながります。